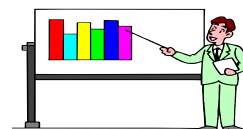


# 事後評価をいただいた調査研究の紹介




平成 15 年 7 月開催の第 1 回課題評価委員会で事後評価をいただいた 3 つの調査研究課題の概要を紹介いたします。

## 1. 「山梨県内の新改築住宅室内空気中の化学成分実態調査」

新築・改築住宅の室内空気には、建築資材や壁紙などに由来するさまざまな有機化合物が含まれていることが知られています。これらの物質により健康障害を起こすことがあり、いわゆる「シックハウス症候群」として問題視されています。

山梨県内の新築・改築住宅の室内空気中の有機化合物による汚染実態を把握する目的で、平成 13～14 年度に県内の 15 新改築住宅の室内外の空気を捕集管により採取し、揮発性有機化合物（以下「VOC」と記す）約 110 成分について分析を行いました。

その結果、国が室内濃度指針値を定めている物質のうち、トルエンについて 2 住宅で指針値（ $260 \mu\text{g}/\text{m}^3$ ）を超えていました。

測定できた VOC の成分の合計値（以下「TVOC」）は、約 135～1430（平均値：約 477） $\mu\text{g}/\text{m}^3$  と住宅により大きな隔りがありました（）。TVOC の内訳をみると、芳香族炭化水素、脂肪族炭化水素類の割合が高く、これら 2 種類の VOCs で全体の約 50

～80%を占めていました。TVOC の暫定目標値  $400 \mu\text{g}/\text{m}^3$  を超過した住宅は 15 住宅中 8 住宅と多く、新築・改築住宅でのこれら有機化合物濃度の高いことがこの調査から把握できました。

しかしながら、この調査では発生源の特定調査までは行われていませんので、今後の課題として発生源を探り、低減化への対策を検討する必要があるものと考えられました。測定した屋外空気の VOC 濃度が低いことから、根本的な対策ではありませんが、当面、換気を頻繁に行うことが最も簡単で有効な手段の一つと考えられました。

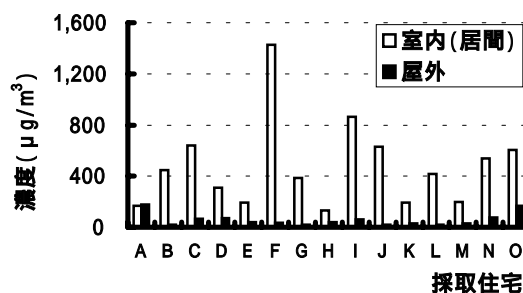


図 屋外及び室内空気中のTVOC濃度

## 2. 「山梨県におけるインフルエンザ動向解析」

インフルエンザは冬季の代表的な感染症で、その原因となるインフルエンザウイルスは A 型と B 型に大きく分類され、頻繁に抗原性を変化しながら毎年、流行を繰り返しています。当所では、感染症流行予測調査および感染症

発生動向調査を通して、山梨県におけるインフルエンザの動向を調査しています。今回は、過去数シーズンのインフルエンザの動向について解析しました。

感染症流行予測調査では、山梨県民のイン

フルエンザに対する抗体保有状況を調査し、年齢別の抗体保有率の分布を解析しました。近年、A型では抗体保有率が高いものの、B型では顕著に低い傾向が認められました。今後も継続的に調査を行うことで、流行前の抗体保有状況や流行にともなう抗体の獲得状況のデータが得られると考えています。

感染症発生動向調査では、かぜ様患者からインフルエンザウイルスを分離し、流行の型を把握するとともに(図) ワクチン株との抗原性の比較を行いました。ここ数シーズンでは、A型はワクチン株と抗原性が類似した株が、B型では異なった株が流行していました。ワクチン株との抗原性を常時モニタリングす

ることで、新型インフルエンザなどの抗原性が変異した株の侵入を監視することができま

す。今後もウイルスの分離同定、抗原性の解析等が迅速に実施できる体制を整備していきたいと考えています。

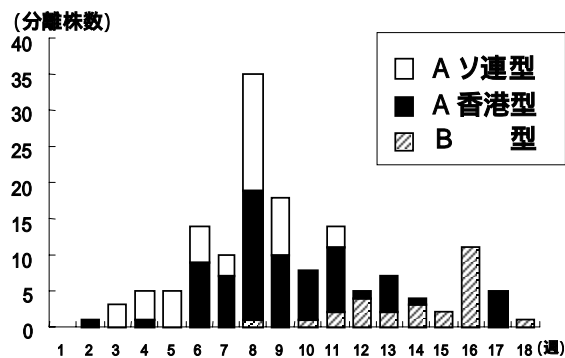


図 2001/2002 シーズンのインフルエンザウイルス分離株数

### 3. 「山中湖（平野地区）における水草の変遷」

山中湖の平野地区は富士五湖の中で最も水草が豊富で多様性も高いとされていました。しかし、漁業関係者から近年山中湖の水草は著しく減少してきたとの声が聞かれるようになりました。

そこで平野地区の水草の種組成、分布量を調査して現状を把握し、さらに 70 年代の調査結果と比較してみました。

調査は平成 12 年 8 月に行われ、図に示したように 4 種の沈水植物（コカナダモ、ホザキノフサモ、クロモ、センニンモ）と 1 種の浮葉生殖物（コオニビシ）が確認されました。また、群落は入江の北部から西部の水深 1m 前後の浅瀬にのみ存在しました。全体的にコカナダモが生育しており、沈水植物帯のほとんどを占めていました。他の 3 種は点在し、少量でした。

1970 年の水草水平分布\* と比べると、エゾヤナギモ、ヒロハノエビモ、カタシャジクモ

の 3 種が確認されず、新たにコカナダモが確認され沈水植物相や分布範囲さらに優占種の変化が確認されました。特に入江中央部のエゾヤナギモを優占種とする群落の衰退は、水中照度の低下が少なからず影響していると考えられました。また、水草帯の変化には水位の変動や浅瀬底質の部分的なヘドロ化等も寄与していると考えられました。

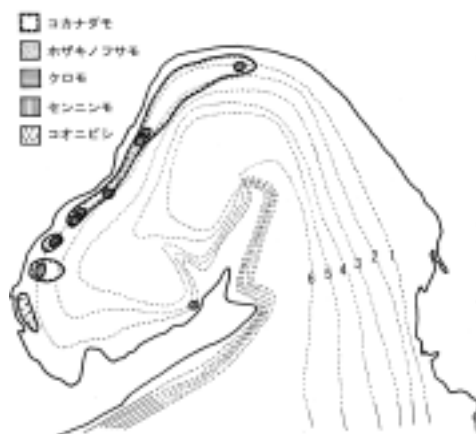


図 水草水平分布

\* 延原ら：富士山総合学術報告書（1971）